

チチブリンドウの話

等々力 政彦

秩父の名を冠する植物のひとつに、チチブリンドウ *Gentianopsis contorta* (Royle) Ma があります(図1)。石灰岩の分布する場所に生育しており、リンドウ科チチブリンドウ属(あるいはシロウマリンドウ属、タカネリンドウ属、ヒゲリンドウ属とも呼ばれます)に分類されている珍しい植物です。チチブリンドウ属の植物は世界に約24種、そのうち日本には3種が分布しています。

(1) 和名の由来

後ほど詳しく述べますが、チチブリンドウは、日本では秩父山地の十文字峠近くで発見されました。そのため、「秩父のリンドウ」となった訳です。日本における「リンドウ(竜胆)」の名前は古く、10世紀初頭の『本草和名』、『倭名類聚抄』にはすでにみえています。漢語の龍膽(りゅうたん)を語源とし、当時の日本語では衣夜美久佐(疫病草)、あるいは瀬可奈(苦菜)と呼ばれていたようです。リンドウの薬効に注目した呼び名とってよいでしょう。竜(「龍」の古字)の音は、呉音では「リュウ」、漢音では「リョウ」、他に「ロウ」などもあります。しかしこれを「リン」と読むのは、むしろ中期漢語の *lywŋ* に近い、例外的な読み方です。また膽(「胆」の古字で、キモの意味)も「タン」で、「ドウ(ダウ)」の読み方は特殊です。おそらくは、漢語もご存じのさかしらなお医者様が、「これはリンドウというて、古来より靈薬として用いられ・・・」などと自らの知識の高さを誇示することに使われ

たためかかもしれません。いずれにせよ、『日葡辞書』をみると、安土桃山時代には *Rindō* と呼ばれていました。「エヤミグサ」はどこに行ってしまったのでしょうか？

(2) 学名の話

生物の種には、それぞれ一つ一つ学名と呼ばれる名前がついています。例えばキュウリ(胡瓜)は、フランス語ではル・コンコンブル *le concombre*、バシコルト語ではクヤル *кыяр* などなど、世界中でさまざまに呼ばれています。これでは国際会議のときに混乱してしまいます。そこで、生物を分類して命名するときは、ヨーロッパの古典言語であるラテン語(あるいは古典ギリシャ語)を使って、属名のあとに種名をつけて表記すること(二名法)、と決められています。これが学名です。ちなみにキュウリは *Cucumis sativus* L.。ラテン語で「栽培化されたキュウリ」を意味します。

学名はなかなか便利で、例えば「コイワカガミ」という和名だと、この植物が何かの種の変種なのか、独立した種なのかがわかりません。しかし学名をみると、*Schizocodon soldanelloides* Siebold et Zucc. var. *soldanelloides* f. *alpinus* Maxim. であり、シーボルトとツッカーリーニ両氏が分類・命名したイワカガミのうち、狭義の変種イワカガミから、マクシモヴィッチ氏がさらに品種として分類したものの、であることがわかります。

(3) チチブリンドウの発見と命名

種としてのチチブリンドウは、1835年、インド生まれのイギリスの植物学者ロイル氏 John Forbes Royle によって、ヒマラヤ山脈のリンドウ属の植物 *Gentiana contorta* として報告されました。彼のラテン語の報告書では、「花冠が5裂している」と、誤っています。本当は4裂で、図ではきちんと描かれています。種小名の *contorta* は「ねじれた」という意味で、花冠の先端の裂けた部分が一部重なって、よじれているように見えることに由来していると思われます(図2)。



図1 チチブリンドウのレプリカ

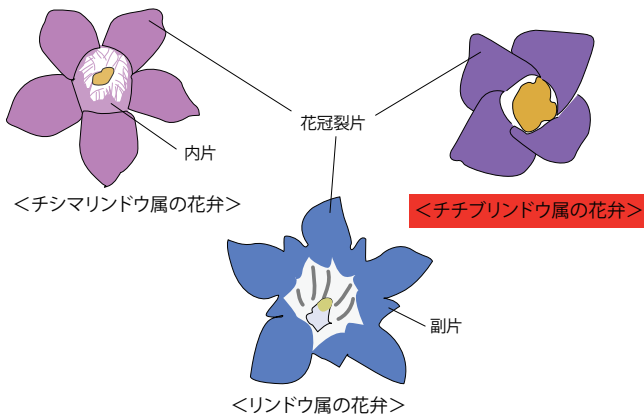


図2 チチブリンドウ属の特徴

ちなみに、リンドウを意味する *Gentiana* はラテン語ですが、かなり古い単語で語源がはっきりしません。古代ローマの軍人・政治家・博物学者であった大プリニウス (AD 23-79) は、「リンドウの薬効を発見したイリュリア (現在のバルカン半島西部にあった) の王、ゲンティウスに由来する」としていますが、どうもこれは怪しい情報のようです。

続いて今度は 1927 年 9 月に、ヒマラヤから遠く離れた中国の遼東半島から山島一海氏^{やまつた かずみ?}が採集。植物学者の北川政夫氏によって分類され、1934 年にヒロハヒゲリンドウ *Gentiana yamatsutae* Kitagawa として発表されました。当時北川氏は、ロイルの発見した植物には気づかなかったのです。これに気づいたのは、中国植物学会事務局長の馬毓泉 (Mǎ Yù-quán) 氏でした。1951 年、馬氏はいくつかの特徴によってリンドウ属 *Gentiana* から、チチブリンドウ属 *Gentianopsis* を独立させました (図 2)。*Gentianopsis* とは、ラテン語のリンドウ *Gentiana* に、古代ギリシャ語のオプシス -ὄψις「~のように見える」をくっつけた造語で、「リンドウに似た」という意味です。

馬氏はこの論文中で、*Gentiana contorta* を *Gentianopsis contorta* と改名し、さらに「ヒロハヒゲリンドウ」がロイルの発見した植物と同じ種であると指摘。*Gentiana yamatsutae* の名前をとりけしました。学名の世界では、先に命名した人が決めた学名を残すことがルールなのです。

馬氏の発表に続く 1952 年、尾台喜一氏^{だいすけ}によって秩父山地から「謎のリンドウ」が発見され、秩父市出身の菌類学者、清水大典氏を通じて植物

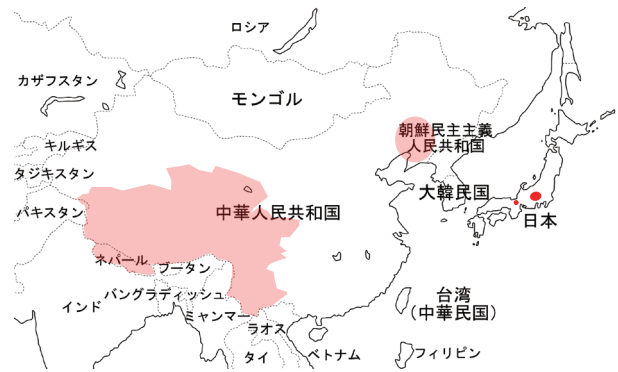


図3 *Gentianopsis contorta* の分布

学者の佐竹義輔氏^{よしすけ}に分類が依頼されました。佐竹氏ははじめ、清水氏に敬意を表し、チチブリンドウ *Gentiana shimizuana* として新種発表を準備していました。ところが彼が調べていくつれ、上記のことがどんどん明らかになってゆき、とうとう「*Gentiana shimizuana*」は、幻の新種となってしまったのです。佐竹氏の落胆は大きかったでしょうが、強烈な印象を残したようで、この顛末を当館の前身である秩父自然科学博物館の研究報告に載せています。発表の順番から行くと、和名は「ヒロハヒゲリンドウ」とすべきでしょうが、一般的にはチチブリンドウの名前が残されています。

その後チチブリンドウは、秩父山地だけではなく、南アルプスや伊吹山からも発見されました。

(4) おわりに

このように、現在のところチチブリンドウは *Gentianopsis contorta* に分類されています。しかしその分布をみると、遼東半島と日本のものは、ヒマラヤ山脈周辺のものからずいぶん隔離分布しています (図 3)。今後 DNA 分類が進むと、再び消滅した学名が復活する時が来るかもしれません。少なくとも佐竹氏はそれを期待する形で論文を締めくくっていました。

当館には、チチブリンドウの素晴らしいレプリカ (図 1) が展示してあります。どこにあるか探してみてください。また、当館で 10 月 17 日 (日) まで開催中の企画展「ジオパーク秩父へ出かけよう！」でも、秩父にまつわる名前をもつ生物が展示されています。ぜひ訪ねてみてください。

(とどりき まさひこ・主事)